



生かされ、生きるチカラ。

「未見の自分」に出会うために、 繰り返し学び続けていく。

花巻教会 富田和男さん

20歳の時にふとしたきっかけで極道の道に入ってしまった富田さんは、痛切に後悔し、25歳で組から逃げだした。故郷を後に知人を頼って仕事に就くものの、見栄や虚勢を張る性格から職場の雰囲気壊し、世話になっていた人から「お前は人を不幸にする人間だ」と一喝される。その後も職を転々として10年が過ぎた頃、父の説得で故郷に戻る。新幹線の保線工事を請け負う会社でやっと腰を落ち着けて働いた。しかし、「お前は人を不幸にする人間だ」という言葉がいつまでも胸に刺さるように刺さったままだった。そんな時、母のすすめで仏教の修行を積み始める。どんな人も見捨てず、相手の心に寄り添う人々の輪の中で、両親や周囲に迷惑をかけてきた自身を見つめ直し、「人を幸せにできる人間になりたい」と心から願うようになった。自然と人とも温かく触れ合うことができるようになった富田さんは、未だ見たことがない自分に出会えることを楽しみに、繰り返し学び続けている。



「南無」とはなんぞ

「世間虚仮(いま私たちが生きている世界は仮のもの)、唯仏是真(ただ仏の世界だけが真実である)」という言葉があります。これは、他と比べて優劣を評価する錯覚の世界に生きる私たちも、本来はみな等しく尊い存在であって、大小・長短の比較などしなくてよい世界に住んでいるのだ、ということですが、また、私たちの生命は有限に見えますが、本来は無限であり、永遠のいのちなのです。だから、この世を「仮」といい、絶対や無限・永遠を「本然」とする世界を「真実」というのです。

その「真実」に帰ることを本義とするのが宗教であり、信仰です。

こういうと難しいことのように思いますが、仏教で唱えるお題目「南無妙法蓮華経」の「南無」が、まさにそれです。「南無」とは、帰依とか帰命を意味し、「帰る」という字が使われています。何に帰るのかといえば、「真実」に、です。

その意味で、お題目をより端的に示せば「南無真実」ということですが、本来、宗教はみな、ただ一つの真実にめざめる「南無真実」の立場だといえます。

立正佼成会